

大阪大学 学生支援GP
News Letter

K a e r u 通信 No.9

くりふ Change Return Incubate Frog

最終号

☆2011年3月7日発行 ☆季刊

☆発行・編集／大阪大学学生部キャリア支援課キャリア支援第一係 ☎565-0871 吹田市山田丘1-1

☆ホームページ／http://www.osaka-u.ac.jp/jp/campus/leadership_GP/index.htm



REPORT

平成22年度合宿研修レポート

1年次対象プログラム = 2・3

2年次対象プログラム = 4・5

3年次対象プログラム = 6・7

MESSAGE

担当教職員からのメッセージ = 8

* * * * *

特集 平成 22 年度合宿研修リポート

1 年次プログラム 2010 年 8 月 17 日（火）～ 8 月 20 日（金）

世界と日本そして市民としての私

* * * * *

第 1 日目

オリエンテーション 学生部

イントロダクション 太刀掛俊之准教授

はじめに、学生部キャリア支援課協課長から事務連絡やスタッフの紹介を行いました。

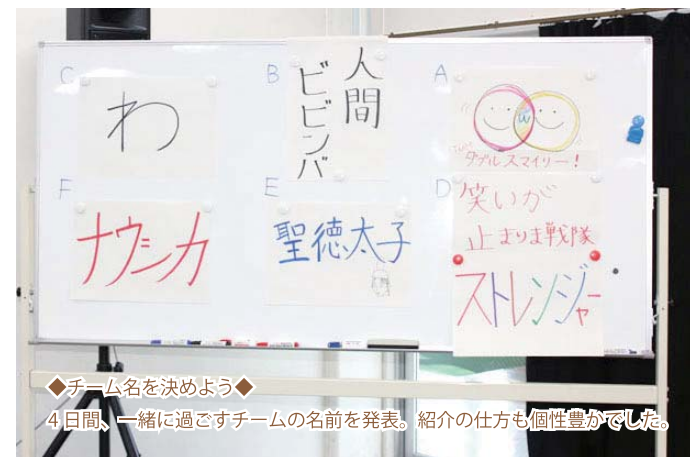
つぎに、太刀掛先生から大阪大学の教育理念を明示した上で、本プログラムの実施の背景やねらいなどの説明がありました。

チームビルディング

学生部・リンクアンドモチベーション

◆自己紹介◆

白紙に自分を表現し、全員の前で自己紹介。初めて顔を合わせるメンバー同士、緊張の面持ちでした。



◆ピクチャークイズ◆

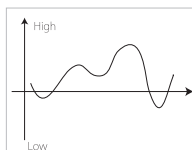
チーム対抗のワークです。各班一人ずつ違う絵が配られますが、お互いの情報をつなげていくと・・・！！

「相手の前提と。自分の前提が違う」と、「相手に理解させてようやく伝わる」といえる」と等、コミュニケーションで大事なポイントを学びました。



◆モチベーション曲線を描いてみよう◆

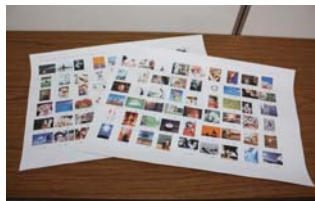
自分の人生を振り返って、人生におけるターニングポイントとなった時期・出来事をモチベーションの高低と合わせて紙に記入しました。グループ内で、メンバー同士の結果を共有し、お互いの理解を深めました。



自己認識・気づき 木川田一榮教授

◆「人に出会うこと」の素晴らしさ◆

木川田先生を感じる「人と出会う」とこの素晴らしさについてレクチャー。先生の人生に数々の刺激と、人生における重要なキーワードを与えてくれたのは「人との出会い」だったそうです。



◆「若者の力」の素晴らしさ◆

若者の力の素晴らしさや、若い感性が未来を作るエピソードとして、先生も関与したナレッジキャピタルのワークショップに関する話を例に挙げました。阪大生には、阪大の「地域に生き世界に生きる」というモットーから、地域活性化のプロジェクトに、よりコミットしてもらいたい、また若い感性を社会に向けてどんどん発信してほしい、というメッセージを感じました。



◆自己認識・気づき（個人ワーク）◆

理性ではなく、感性で写真を選び、そこから自己認識に気づかせることを目的としたワーク。様々な写真の中から、好きな写真とその理由、また嫌いな写真とその理由について考えました。
※自己認識・気づきの結果については、最終日（20 日）の「総括」で発表。



第 2 日目

ケアについて考える 西村ユミ准教授

◆盲ろう者と、補助を行う人の疑似体験◆

盲ろう者およびそれを介助する人の立場を擬似的に体験し、その後に実際の身体障がいを持つ方のケースについてディスカッションを行いました。自分と相手の前提は大きく違うということ、その中で相手の立場に立ったコミュニケーションをとることがケアには必要であることを学びました。



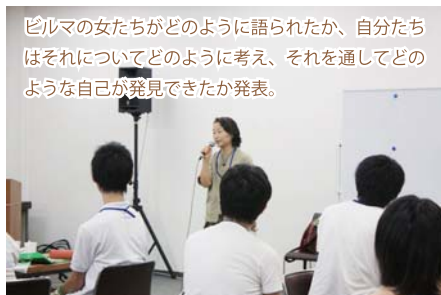
他者を語る 自己を語る

～ビルマの事例から女たちはどのように語られてきたか～

南田みどり教授

◆他者を語ることから、どのような自己が見えるか発見しましょう◆

ビルマに関する複数の資料を読み取り、それを元にディスカッションを行いました。情報には、必ず一定の属性（主観）が混入するため、複数の情報を照らし合わせて分析を行う必要があること、複数の角度から客観的に分析を行う事で、物事の本当の姿にちかづくことができることを感じました。



安全・安心とリスクを考える

毎日新聞大阪本社 野田武氏・山本仁教授・富田賢吾講師

◆様々な立場から捉えられる事象・情報を認識し、その背景を推察する思考の訓練◆
大学で事故が起こったという設定で、それに対する大学の対応と記者の対応を実践しました。起こった事故に関する会見に対して、会見を行う大学側とそれに対する記者側に分かれて、実際に当事者となって、想定しうる状況を実演。大学側は事実情報を得るために、観点を提示して情報収集を行い、記者会見の流れを設計していきます。記者側は、想定質問例を検討し、正確な情報収集を行う姿勢を取り、最後に得た情報から新聞記事を作成しました。



第 3 日目

懐疑的に考えること 菊池誠教授

◆懐疑的思考についてのレクチャー◆

地下鉄サリン事件、昨今発売された村上春樹氏の著書「1Q84」、Checker Shadow Illusion、グラフ（平均寿命、ガン死亡率など）、図表などの様々な例を挙げ、懐疑的思考の重要性を考えました。また、9・11 事件や人類の月面着陸の映像から当時の模様を伝え、多様な視点の考えからひとつの事実を疑い続けること＝懐疑的思考の本質を説明。主観的事実と客観的事実の捉え方、また自らの元来持っている概念について深く掘り下げてみる思考を学びました。



ことばの仕組み 井元秀剛准教授

◆「ことば」を題材にして考える訓練の実践◆

「ことば」を題材にして、考える訓練をするために、2 題の課題が先生から出されました。ひとつの課題を選び、グループごとにディスカッションを行いました。

①「学生」を辞書でひくと、「学校、特に大学で学ぶ人」とあり、これがいわゆる「学生」の「意味」です。では、「アリストテレス」などの固有名詞に「意味」はあるのでしょうか。
②「鏡に自分の体を映すと、右と左が逆に映ります。でも、どうして上と下は逆にならないのでしょうか。その理由を考えてください。」



未知との出会い、既知を探る試み

～ダムタイプ≪S/N≫記録映像の上映を通じて～

木ノ下智恵子特任准教授

◆記録映像ダムタイプ≪S/N≫の観賞◆

観賞した映像をもとにグループディスカッションを行いました。ホモセクシャル、セックスワーカー、HIV+などのマイノリティに属する人々によって創られたビデオ・アートを観賞したあと、お互いが感じたことを画用紙に記入してグループの中で共有しました。お互いの感想についてグループ内で話しあった後、全体で共有し、個々人の感じ方を知る事で、感性や価値観の広がりを実感しました。



第 4 日目

総括 木川田一榮教授

◆イントロダクション～リーダーシップとは～◆

本講義の2つのポイントとして、①自己解釈する（感性／理性判断）、②経験を物語る（Lessons Learned）の2点を伝達されました。また、このプログラムを実施する背景として、阪大スタイルのリーダーシップについて言及し、阪大の目指すリーダーシップがユニークな点は、①国際性、②教養（Critical Thinking）、③デザイン力という3つの柱を教育理念に掲げている点だということをうかがいました。

◆自己認識・気づき◆

初日の木川田先生の講義で行った、個人の価値観・志向などを分析するチェックシートの結果を全体スライドにて共有し、各人がその結果に対する気づきや発見、その理由などを発表しました。自分が今まで気づけなかった潜在的志向など意外な発見があり、改めて自分自身を再認識できる機会となりました。



◆ストーリーテリング◆



今回の4日間のプログラムを通じて、「どのような経験から、何を習得したのか。」「私にとって、その意義とは何であったのか」という2点について話し合いました。なるべくこのプログラムで話をしていない者同士で5人1組のグループを作り、輪になって座り、お互い語りあいました。このワークを3回行い時間を3分、2分、1分と短縮していきました。

エンディング リンクアンドモチベーション

◆アドバイススクランブル◆

3泊4日をともししてきたグループのメンバーからフィードバックをもらいました。その内容をもとにこれから1年間の成長のためのキャッチコピーを策定・共有しました。



◆アワード◆

様々な形で賞タイトルを設定し、会場全体で投票を行った結果を、ムービー形式で発表しました。

◆エンディングムービーの上映◆

音楽とテキストメッセージで、3泊4日の合宿研修の内容をまとめました。

特集 平成 22 年度合宿研修リポート

2 年次プログラム 2010 年 9 月 13 日（月）～ 9 月 16 日（木）

市民との対話と協創

第 1 日目

オリエンテーション 学生部

イントロダクション 太刀掛俊之准教授

※ 1 年次参照

チームビルディング 学生部・リンクアンドモチベーション

◆グループ内で他己紹介◆

ペアになりインタビューしあい、相手の価値観や信念を「漢字一字」で表現し紙に書き出し、それを使い他己紹介を行ないました。インタビューをすることによって、これから一緒にワークする仲間を知ることができました。



少しずつ自由になるためにー自己とむきあう／他者とかかわる

舞踊家 岩下徹氏

はじめにチームビルディングで行った「漢字一字」での自己紹介を岩下先生がされました。ご自身を『変』という字で表現されておりました。

◆即興ダンスの上映・解説◆

岩下先生ご自身が出演されている即興ダンスの映像を上見ながら具体的なイメージを形成しました。

◆「自己とむきあう／他者とかかわる」を理解・体感◆

体をほぐして（緩めて）リラックスする動作をおこない、自身が解放される感覚を体験し、二人組になり交互にポーズをとりあい（相手のとったポーズに応える）、相手を感じて動く即興ダンスをし、『他者につながる』ことを体感しました。



自己認識・気づき 木川田 一榮 教授

※ 1 年次参照

☆懇親会☆

初日の夜は懇親会（バーベキュー）をしました。グループの違う人とも交流が持てました。



第 2 日目

相談・交渉を考える～人とつながり、人をつなぐ

弁護士 大澤恒夫氏



はじめに大澤先生が自己紹介や本日のテーマについて説明がありました。

◆逆・腕相撲◆

腕相撲の逆バージョンで、言葉を交わさず目をつぶって自分の手の甲を机につけることができれば加点されるというゲームを行ないました。

◆能面ロールプレイ◆

2008 年に起こった八王子の無差別事件で逮捕された犯人に「相談相手がいなかった」ことから問題提起。相談相手がいないことはどういうことなのかについて考えるため、能面ロールプレイを行いました。ペアになり、一人が能面のように無表情な顔をして話をします。つぎに人間（いつもとおりの表情）の顔をして話をします。

それぞれの立場で、何をどう感じたか？ということを考えディスカッションを行いました。

その他、『物語論と傾聴』をテーマにしたお話や、『交渉は楽しい！』『プロフェッショナル：瀬谷ルミ子の活動』などを視聴しました。

最後に、この講座の振り返りを大澤先生にいただきました。

「人とつながり、人をつなげる」をテーマに、他者の存在、その関わりを学びました。

臨床哲学：ともに考える喜び 本間直樹准教授

◆対話とは◆

本間先生が学生一人ずつと自己紹介・この合宿研修について等、インフォーマルな対話をしました。

哲学カフェがはじめて開かれたフランスのパリのバスチユ広場にある café de phares での哲学カフェの様子もご紹介くださいました。

◆臨床哲学とは何か◆

本間先生が所属されているグループの活動の映像等を紹介していただき、感想を共有しました。

◆物語のメッセージを想像する◆

『らくだのパレリーナ』という物語を読み（本間先生が予め結末をかくしている）、グループで話の結末を考え、グループごとに発表しました。

今回はセッションでは、何をどこまで進めよう、ということ言うような枠を決めずに、決められていないからこそ可能性をどんどん広げることができるのだということを説明していただきました。目的と合理性に縛られず、物事に対して柔軟であることの重要性を学びました。



哲学カフェ 本間直樹准教授

まずファシリテータを選びテーマ決め、いくつかの候補の中から『異性と友達になれるか？』をテーマに哲学カフェを行いました。

学生が議論するために最低限必要な事柄のみ伝達した後は、場の進行を含め、全てを学生に任せることで、自由な場と学生の主体性のある場を創り出し、オープンかつ活発なコミュニケーションが実現する場を創造しました。学生たち自身に湧き上がる疑問や主張そのものを抽出させ、その課題を設定し、会場内ディスカッションを実施することで、対話の場を持って、対話を交わすことの重要性を学びました。



第 3 日目

障害者支援は誰のため？

松原崇助教

まず、松原先生から今回の講義を受けるにあたってのテーマや心得をお話いただきました。

◆アイマスクをしながら散歩◆

ペアを作り、一人が目隠しをしてもう一人はナビゲート役となり屋外を散歩しました。そのあと、グループ内で気づきや感想を共有し、グループごとに発表しました。

◆人生ゲーム◆

グループから一人代表者を選びそれぞれが、

①障害を持っている男性、②障害を持っていない男性、③障害を持っている女性、④障害を持っていない女性、といった立場に立ち、人生で起こる出来事にどう感じてどういった選択をするか、ネガティブかポジティブで答えていきます。そのあと、グループで共有したあと全体に向けて発表しました。

◆パネルディスカッション◆

学生からグループワークをしたいという声があがりました。これまでの講義内容をふまえたテーマを設定し、グループは関係なく、好きなテーマの議論に自由に参加するワークを行いました。

「障害のある人の現実ではなく、障害のある人にとっての現実を、社会や私たち健常者がどのように捉えていくべきか」について考えさせられる講義でした。



日本語の将来をみんなで考える 金水敏教授

金水先生の自己紹介のあと、参加学生の出身（方言）についてアンケートを取りました。

◆世界の言語・日本語と英語グローバリズム◆

まず『危機言語』、『言語獲得モデルと言語資源論』、『英語世紀の中で、日本語が減びるとき』の3つのテーマについてレクチャーを受けました。

◆グループディスカッション◆

①英語教育・外国語教育、②国語教育、③国語のあり方、④危機言語・危機方言、というテーマでグループディスカッションをしました。次のワークであるプレゼンテーションに備え、議論を重ねました。

◆プレゼンテーション・全体ディスカッション◆

全グループの発表内容について皆で議論し、先生の意見や見解も踏まえながら、英語教育の現状だけでなく、国語教育の現状や日本の言語関係についてまで話し合いました。

今後の英語教育や国語教育のあり方だけでなく、言語や文化を維持し、人類共通の貴重な文化的財産としてそれぞれの言語を保管していくために、自分たちはどうあるべきかについて考える講義でした。



次世代コンピューティング技術の推進

情報通信研究機構 上席研究員 下條真司氏

◆ディスカッション◆

学生を事業仕分け人と仮定し、「次世代スーパーコンピューターの研究開発」プロジェクトの事業仕分けを行い、この事業は必要なのか否か、何が大切なのかについて、配布される資料をもとに議論しました。学生が事業について投票を行い、必要か不必要かに対する理由と、スーパーコンピューター（略してスパコン）に対する疑問についてもまとめました。

◆スーパーコンピューターについて◆

スパコンの開発事業に関する日本での事業に加えて、海外での事業についてレクチャーを受けました。また、実際にスパコンを用いて竜巻や地球の磁力を映し出した映像を視聴し、スパコン技術の緻密さと正確さを認識しました。そして、スパコンの問題課題について議論し、またどうしたら問題を解決できるのかについて考えました。

最後には多くの学生が一度目の投票時の意見とは異なる意見を持ち、スパコンの可能性について理解したことで、廃止を希望していた学生が見送りに変更するなど、スパコンに対してポジティブな意見が多く見られるようになりました。ポジティブな意見の多くは、スパコンのシミュレーションの技術の素晴らしさを理解した上で、日本もそのような分野により力を入れるべきである、といった科学技術の将来性に期待を寄せる思いから発生していたようです。



第 4 日目

総括 木川田一榮教授

※ 1 年次参照



エンディング リンクアンドモチベーション

『エクササイズ』

ある一定の法則で並んでいる文字の数列について、この数列の法則を考えるゲームをしました。ルールは、数列の法則（＝仮説）を考えるために、その仮説を2回検証すること。法則が分かれば、付箋に3つの数字を書き、スタッフに報告。このミッションは2回の検証をどう使うか、という点がポイントになります。

『アドバイススクランブル』

※ 1 年次参照

『アワード』

※ 1 年次参照



特集 平成 22 年度合宿研修リポート

3 年次プログラム 2010 年 9 月 27 日（月）～ 9 月 30 日（木）

市民社会変革型リーダーの使命と役割

第 1 日目

オリエンテーション 学生部

イントロダクション 太刀掛俊之准教授

※ 1 年次参照



チームビルディング 学生部・リンクアンドモチベーション

◆グループ内自己紹介◆
自分を表現する「漢字一字」を 1 分で考えました。学生みなさんは戸惑いながらも、真剣に自分を表す「漢字一字」を探しました。



◆チームビルディング◆
①10 年後のキャリア設定および共有、②10 年後の問題設定、③問題を解決するための「事業」を考案する、というテーマを順番にグループワーク後、発表をしました。発表は 3 つの役（司会、新組織、記者）に分れ、記者会見の形をとってインタラク션을とりながら行いました。最後に、学生間での振り返りを行い、班単位でのよかったこと、悪かったことに留まらず、個人単位でお互いのフィードバックを行っているグループもあり、メンバー同士の結束が高まったことを実感しました。

自己認識・気づき 木川田一榮教授

※ 1 年次参照

☆懇親会☆

初日の夜は懇親会をしました。
雨天のため、室内でのバーベキューとなりました。



第 2 日目

社会と安全 太刀掛俊之准教授

◆エラータイプ診断◆
20 問の質問に答え、自分のエラータイプを診断しました。大きく分けて、「うっかり（記憶）タイプ」「ぼんやり（注意）タイプ」の 2 つのタイプが存在します。グループ内で日常生活の失敗・エラーと背景要因を振り返り、共有された経験のうち、何点かに絞り、失敗・エラーにいたる過程にはどのような背景要因が存在しているか、意見を幅広く出して結果を集約しました。
◆横浜市立大学付属病院患者取り違え事故のビデオ視聴◆
ビデオ内容から事故を誘発する背景要因を推測し、その背景要因に対して、どのような事故防止案が考えられるかを議論しました。
様々な観点、立場から物事を考える重要性を学ぶことができました。



自分の頭で考える、自分の眼を信じる、《偉人》は信用しない

大阪市立美術館 館長 篠雅廣氏

ある画家（岸田劉生）とその弟子（安井巳之吉）の描いた日記から、画家の人生を紐解いていくという講義を受けました。公表されている事実には誰かの手によって歪曲された部分があったりすることを知り、権威からの引用ではなく、自分の眼で見た物を自分の頭で考えることの重要性を学びました。『芸術とは何か』について考え、篠館長から、『『芸術とは自分を映す鏡である。』ここにくれば、いつも同じ絵が待っている。そんな場所を 1 つでもいいからもっておいで欲しい。』というメッセージをいただきました。



医療現場から国政へ 参議院議員 梅村聡氏

◆妊婦が死亡したケースから考える医療問題◆
帝王切開を行った妊婦の子宮を残そうとしたがために死亡させてしまった医師が、一年半後に警察に逮捕されました。警察の主張としては、「産婦人科の教科書を見たら、子宮を全部摘出しないと書いてあり、あなたはそれをしませんでした。よって、あなたは業務上過失致死です。」というケースについて、医療者はどうすべきだったのか、そして警察はどうすべきだったのかをグループにて議論し、発表しました。医療現場を通じて「政治」を考えることができました。



第 3 日目

私の大切なもの 門田守人理事・副学長

「あなたにとって今一番大切なものはなんですか？」という設問からはじまり、自分にとって大切な人と自己の関係について振り返りました。
そのあと、門田先生から臓器提供意思表示カードが配られ、カードの裏面に書かれた以下の項目に関して、自分ならどの項目を選択したのか、その理由について考えました。また、自己の死と他者に与える影響について議論し、生と死の関係性についても考えました。
最後に、「心から病気に感謝している」と述べた、余命 2 ヶ月と宣告されながらも癌と戦った 13 歳の少女が弁論大会に出場した際の記事を読み、彼女の立場、想いについて、「もし自分が彼女だったら」という仮定のもと、哲学カフェ形式で議論をしました。
この講義では、生と死について考えることを通じて、生命の尊さ、生きていく上で大切なものについて考えることができました。



☆自由時間☆

休憩時間や自由時間に研修室のとなりの部屋で卓球を楽しむ学生も多くいました。



アイデンティティ論から都市の生命に迫る

木多道宏准教授



◆キャンパス作りのシミュレーション◆
キャンパス改善活動のサークルであると仮定し、サークルごとのテーマを決めました。キャンパス環境の価値や問題をどのように捉えるかをグループで議論し、途中経過も含め 3 回発表しました。

◆自分とは何か、自分とはどこにあるのか◆
まず、白紙の中心に自分を位置づけ、「自分」の周りに大切なモノ、コト、ヒトを書きだしました。それをグループ内で発表し、お互いの共通点や相違点を話し合う中で、「自分らしさ」はどこに現れているのか考えました。そして、グループで意見をまとめ、発表をしました。
この講義では、自己のモデルとコミュニティのモデルについて考えることを通じて、個々の間に存在する「関係性」を考えることができました。



信念・コミットメントのゆらぎを考える

瓜生崇氏・福岡晶子氏

「もし、親しい先輩からあるイベントに誘われたらどうするか？」という問題をテーマに実演をました。その様子を皆で観察し、人間関係を壊さないように断るにはどうすればいいのかという問題をグループで議論し、発表しました。
承諾・誘導は日常生活のあらゆる場面に存在します。「何が善で何が悪なのか、それを誰がどのように決めるのか。それによって人それぞれの価値基準は変わる。」それゆえ、信念は絶対に揺らぐものだという認識が必要であることを学びました。



第 4 日目

総括 木川田一榮教授

※ 1 年次参照



エンディング リンクアンドモチベーション

※ 1 年次参照



学生支援プログラム事業推進責任者

大和谷 厚 教授

学生支援 GP を巣立ったみなさんが学内・学外で活躍している姿を見るにつけ、「後生畏るべし」の思いを強く意識します。

太刀掛 俊之 准教授

合宿研修で得られた経験やスキルを実践するべく、社会でのみなさんの活躍を大いに期待しています。

小西 三郎 キャリア支援第一係長

市民社会のリーダーとして、活動の舞台を大学から世界に。皆さんの今後の活躍に期待しています。

木川田 一榮 教授

Great Practitioner のみなさんへ
「近頃阪大に流行るもの。異端、モテ阪、阪大スタイル。くりふ、いちびり、デザイン力。対話、体験、ジムナジウム。(平成の落書)」みんなこの GP を経験したみなさんの活躍ぶりの風評となりますように願っています。

脇 成吾 キャリア支援課長

GP 合宿は学生『共育』の原点。合宿の経験を糧に 自信、勇気、誇りを持ってキャリア形成に励んでください。

奥 諭一 キャリア支援第三係長

この学生支援 GP で学んだことや経験したことを学園生活や市民社会において実践されることを期待しています。

EDITOR' S NOTE

平成 20 年 12 月に創刊いたしました、本学学生支援 GP「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」広報誌『Kaeru 通信くりふ』は、今号をもって廃刊いたします。

ご愛読くださったみなさま、ご寄稿いただきました先生方ならびに学生の方々、本プログラムの活動にご参加いただきました方々には多大なるご支援ご協力いただき、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

来年度からは形をかえてみなさまにお会いできるよう考えておりますので、今後とも「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」をどうぞよろしくお願い申し上げます。

長い間ありがとうございました。

平成 23 年 3 月

『Kaeru 通信くりふ』編集者

尾野・吉田

